

幼児期の運動能力と群れ遊びの関係について

長谷川 勝 一

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第56号抜刷）

論 文

幼児期の運動能力と群れ遊びの関係について

The relationship between moter ability and group play in infancy

長谷川 勝 一

キーワード：体格、運動能力、群れ遊び、自由遊び

研究の目的

新しい幼稚園教育要領が平成22年4月より施行された。新幼稚園教育要領では領域「健康」において、内容の取り扱いに関して「特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲を育つようにすること」という記述が追加された¹⁾。以前より、子どもの体力低下に対する懸念と取り組みの必要性は再三指摘されており、毎年体育の日の後には新聞記事となることが続いている²⁾。子どもの体力増進を目的として、幼児期からスポーツ教室に入る、あるいは園内で教室を開催するケースもある。

しかしながら、幼児期の発達は幼稚園教育要領に「様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい」¹⁾とあるように、日常の遊びを通した活動の中から、体力、情緒、人間関係、社会性、そして知性が総合的に、かつ相互に連携して発達していくことが重要なのである。幼児期においては、たとえば体力のみを個別に取り出して刺激を与え、その能力を伸ばそうとするのは本末転倒である。

古来より、家庭や地域内で、「この指止まれ」から始まる、三々五々に群れて遊ぶ「伝承遊び」と呼ばれる群れ遊びが子どもたちの遊びの中心であった。群れ

遊びには様々な要素があり、このような遊びの中から子どもが総合的に発達していくことは先行研究に詳しい^{3) 4) 5) 6)}。

一方で、子どもを取り巻く環境はどう変化したか。まず、少子化や地域社会が都市化することにより、子どもの足で移動できる「ご近所」で子ども同士の人間関係が希薄化したことがあげられる。加えて、テレビや携帯型あるいは家庭内設置型のゲームマシンが普及し、子どもの遊び自体が変化した。こうしたことを背景として、日常生活の中で子どもの群れが作りにくい現状があり、家庭内や地域内で「群れ遊び」「伝承遊び」が消失しつつあるのも現実である。

このような考えから、子どもの群れ集団が保障されやすい保育園・幼稚園での群れ遊びに注目し、園内での自由遊びとして群れ遊びの導入・推進を行っている⁷⁾。しかしながら、園内で群れ遊びに取り組む際に、群れ遊び活動と子どもの発達の関連性が目に見える形で明確になりにくいのも事実である。

そこで本稿では、幼児期の体格、運動能力の測定と群れ遊びに関する質問紙調査を実施し、それらの関連性について明らかにして、保育や教育への示唆を得ることを目的とした。

研究方法

研究対象：岡山県北部T市内の公立・私立幼稚園5園の年長児143名（男児81名、女児62名）。

調査時期：平成22年2月から10月にかけて実施した。

調査項目：生年月日、性別、身長、体重、20メートル走、立ち幅跳び、硬式テニスボール投げ、群れ遊びに関する質問紙調査（19項目）。

調査方法：体格測定項目の身長・体重と、運動能力測定項目の20メートル走、立ち幅跳び、硬式テニスボール投げについては原田の測定法⁸⁾により測定を行なった。群れ遊びに関する質問紙調査は今回の調査のために自作したものを使用し、園児の担任に調査用紙を配布して回答を依頼した。

研究の手続き：幼児期の体格と運動能力は成長の要因によって強く影響を受けており、測定値のままの比較では性差や月齢あるいは身長の違いによる優劣を考慮していないことが先行研究によって指摘されている⁹⁾。このため、体格と運動能力の評価点はそれぞれ原田の重回帰評価法^{10) 11)}を用いて、身長は月齢による回帰評価、体型、走、跳、投の運動能力項目は月齢と身長による重回帰評価を行ない、それぞれ-3から+3の7段階の評価点を算出した。その上で、走、跳、投の運動能力評価点を合計し、運動能力評価点とした。

群れ遊びに関する質問紙の調査項目の回答は、園内での自由遊び中での子どもの様子に関するもの（18項目）については「当てはまらないもの」から「よく当てはまるもの」までの5段階とし、順位変数としてそれぞれ1から5の数値に変換した。「いつもよく遊ぶ友達の数は平均して何人ですか？」の設問については、「0人」から「5人以上」の6段階とした。いずれの項目についても「不明」の回答選択肢を設けたが、今回の調査対象児の中には「不明」と回答したものはなかった。

基準変数のグループ分類は平均値 $\pm 1/2$ 標準偏差を用いてグルーピングし、統計上の有意水準はいずれも

両側検定で5%とした。

結果と考察

今回、調査・測定した項目の性別の平均値、標準偏差、最小値、最大値を示したものが表1である。

性差については、身長、体重、20メートル走、立ち幅跳び、テニスボール投げのいずれの測定項目においても平均値の差のt検定において統計的に有意差がみられたが、月齢と身長の要因を消去した原田の重回帰評価点では性差は確認できない。質問紙項目においては、Wilcoxonの順位和検定（U検定）を用いて検討したところ、1、5、7、9、12、13、14、16、18の項目においてそれぞれ有意な性差が確認できた。この結果によると、男児の方が、「外遊びが好き」（1）、「友達との意思の疎通が難しい」（5）、「自分の言い分を押し通す（折り合いを付けることができない）」（9）、「他の子に命令することが多い」（12）、「マイルール（自分や特定のグループに都合が良い勝手なルール）を持ち出す」（14）、「ルールが単純な遊びを好む」（15）、「遊びの中でトラブルをよく起こす」（18）傾向が強く、女児の方が、「内遊びが好き」（7）、「先生にまとも付くことが多い」（13）傾向が強いことを示している。

月齢と体格・運動能力の項目間の相関について、ピアソンの相関係数を算出したものが表2であるが、いずれも測定値のままでは月齢と強い相関関係を示している。一方で、原田の重回帰評価点ではいずれも月齢との有意な相関関係が確認できないため、成長の要因を除去できたと判断した。

月齢と群れ遊びに関する質問紙調査の調査項目（19項目）間の相関について、スピアマンの順位相関係数を算出したものが表3であるが、質問項目4、7、10、11、13、19の項目でいずれも統計的に有意な相関がみられた。これらの項目に関しては、月齢が大きいほど、「チームで協力する遊びを好む」（4）、「リーダー役になることが多い」（10）、「いつもよく遊ぶ友達の数の平均」（19）の項目で「よく当ては

表1 調査・測定項目の性別の平均値、標準偏差、最小値、最大値

項目名	全体					男児					女児				
	標本数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	標本数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
月齢	143	76.112	3.717	70	84	81	76.259	3.555	70	84	62	75.919	3.912	70	81
身長	143	114.899	4.554	104.2	126.4	81	115.789	4.628	106.4	126.4	62	113.735	4.179	104.2	126
体重	143	20.755	3.174	14.2	38.4	81	21.417	3.188	16.5	38.4	62	19.890	2.939	14.2	31.4
20m走	143	5.300	0.493	4.3	7.7	81	5.148	0.419	4.3	6.7	62	5.499	0.513	4.7	7.72
立ち幅跳び	143	103.259	15.306	60.0	135.0	81	107.432	15.164	68.0	135.0	62	97.806	13.690	60.0	130
テニスボール投げ	143	8.009	2.954	1.8	15.8	81	9.347	2.917	3.2	15.8	62	6.262	1.900	1.8	11.2
身長評価	143	0.077	1.116	-3	3	81	0.210	1.097	-3	2	62	-0.097	1.117	-2	3
体型	143	0.084	1.094	-3	3	81	0.235	1.080	-3	3	62	-0.113	1.079	-3	3
走評価	143	-0.685	0.856	-3	2	81	-0.568	0.860	-3	2	62	-0.839	0.827	-3	1
跳評価	143	-0.797	0.935	-3	1	81	-0.840	0.962	-3	1	62	-0.742	0.897	-3	1
投評価	143	-0.462	0.974	-3	2	81	-0.519	0.904	-3	1	62	-0.387	1.053	-3	2
運動能力評価点	143	-1.944	2.044	-9	4	81	-1.926	2.041	-8	4	62	-1.968	2.048	-9	2
質1 外遊びが好き	143	4.035	1.006	1	5	81	4.284	0.892	1	5	62	3.710	1.053	2	5
質2 遊ぶ友達はいつも同じである	143	4.140	1.015	1	5	81	4.185	0.904	1	5	62	4.081	1.140	1	5
質3 ルールが明確な遊びを好む	143	3.538	1.009	1	5	81	3.667	1.006	2	5	62	3.371	0.988	1	5
質4 チームで協力する遊びを好む	143	3.238	1.115	1	5	81	3.247	1.117	1	5	62	3.226	1.113	1	5
質5 友達との意思の疎通が難しい	143	2.315	1.027	1	5	81	2.617	1.072	1	5	62	1.919	0.809	1	5
質6 友達と遊ぶのが好き	143	4.510	0.708	1	5	81	4.506	0.705	3	5	62	4.516	0.713	1	5
質7 内遊びが好き	143	3.385	0.953	1	5	81	3.111	0.930	1	5	62	3.742	0.860	2	5
質8 他の子に付いて遊ぶことが多い	143	3.217	1.207	1	5	81	3.074	1.163	1	5	62	3.403	1.237	1	5
質9 自分の言い分を押し通す	143	2.678	1.168	1	5	81	2.938	1.241	1	5	62	2.339	0.966	1	4
質10 リーダー役になることが多い	143	2.741	1.294	1	5	81	2.840	1.242	1	5	62	2.613	1.348	1	5
質11 一人で遊ぶのが好き	143	2.308	1.092	1	5	81	2.407	1.097	1	5	62	2.177	1.070	1	5
質12 他の子に命令することが多い	143	2.629	1.198	1	5	81	2.852	1.198	1	5	62	2.339	1.135	1	5
質13 先生にまともわり付くことが多い	143	2.958	1.077	1	5	81	2.654	1.044	1	5	62	3.355	0.985	1	5
質14 マイルールを持ち出す	143	2.587	1.185	1	5	81	2.901	1.223	1	5	62	2.177	0.992	1	5
質15 は一としていることがある	143	2.664	1.064	1	5	81	2.679	1.028	1	5	62	2.645	1.109	1	5
質16 ルールが単純な遊びを好む	143	3.203	0.928	1	5	81	3.383	0.937	1	5	62	2.968	0.861	1	5
質17 他の子に命令されることが多い	143	2.497	0.967	1	5	81	2.580	1.041	1	5	62	2.387	0.849	1	4
質18 遊びの中でトラブルをよく起こす	143	2.538	1.256	1	5	81	3.012	1.222	1	5	62	1.919	1.005	1	5
質19 いつもよく遊ぶ友達の数	143	3.280	1.203	0	5	81	3.309	1.263	1	5	62	3.242	1.117	0	5

p<0.001 ※※※
p<0.01 ※※
p<0.05 ※
p<0.1 △

まる」「当てはまる」を選択したケースが多く、反対に月齢が小さいほど、「内遊びが好き」（７）、「一人で遊ぶのが好き」（１１）、「先生にまわり付くことが多い」（１３）の項目で「よく当てはまる」「当てはまる」を選択したケースが多いという傾向を示している。

この他、有意水準には到達しなかったが、月齢が大

きいほど、「他の子に命令することが多い」（１２）の項目で「よく当てはまる」「当てはまる」を選択したケースが多く、月齢が小さいほど、「他の子に付いて遊ぶことが多い」（８）、「ルールが単純な遊びを好む」（１６）、「他の子に命令されることが多い」

（１７）の項目で「よく当てはまる」「当てはまる」を選択したケースが多い傾向も伺えた。

運動能力評価点の高低で群れ遊びに関する質問紙調査項目の回答結果に差異があるかどうか、Wilcoxonの順位和検定（U検定）を行ったものが表４である。説明変数が順位変数であるため、ノンパラメトリック検定を実施したが、説明に際しては平均値の方が理解しやすいと思われるため、平均値も表示している。

この結果、有意差が確認できた項目としては、質問項目３、４、５、８、１０、１１、１２、１５、１９であった。つまり、運動能力が高いグループは低いグループに比較して、「ルールが明確な遊びを好む」（３）、「チームで協力する遊びを好む」（４）、「リーダー役になることが多い」（１０）、「他の子に命令するこ

表２ 月齢との相関係数（ピアソンの単相関係数）

項目名	月齢との相関係数	
身長	0.316	※※※
体重	0.173	※※
20m走	-0.348	※※※
立ち幅跳び	0.248	※※
テニスボール投げ	0.344	※※※
身長評価	-0.110	
体型	0.032	
走評価	-0.033	
跳評価	-0.025	
投評価	0.092	
運動能力評価点	0.019	

表３ 月齢との相関係数（スピアマンの順位相関係数）

項目名	月齢との相関係数	
質１ 外遊びが好き	0.094	
質２ 遊ぶ友達はいつも同じである	-0.018	
質３ ルールが明確な遊びを好む	0.117	
質４ チームで協力する遊びを好む	0.230	※※
質５ 友達との意思の疎通が難しい	-0.008	
質６ 友達と遊ぶのが好き	0.131	
質７ 内遊びが好き	-0.187	※
質８ 他の子に付いて遊ぶことが多い	-0.159	△
質９ 自分の言い分を押し通す	-0.023	
質１０ リーダー役になることが多い	0.168	※
質１１ 一人で遊ぶのが好き	-0.175	※
質１２ 他の子に命令することが多い	0.156	△
質１３ 先生にまわり付くことが多い	-0.176	※
質１４ マイルールを持ち出す	0.104	
質１５ ぼーっとしていることがある	-0.127	
質１６ ルールが単純な遊びを好む	-0.142	△
質１７ 他の子に命令されることが多い	-0.162	△
質１８ 遊びの中でトラブルをよく起こす	0.080	
質１９ いつもよく遊ぶ友達の数	0.333	※※※

表 4 運動能力評価点の高低別による群れ遊び調査項目の U 検定結果

	項目名	標本数	平均値	標準偏差	順位和	z 値	有意差
質 1	外遊びが好き						
	運動能力が低い	48	3.813	1.045	2307.5	1.882	△
	高い	59	4.169	0.985	3470.5		
質 2	遊ぶ友達はいつも同じである						
	運動能力が低い	48	4.188	1.085	2646.0	0.367	
	高い	59	4.169	1.003	3132.0		
質 3	ルールが明確な遊びを好む						
	運動能力が低い	48	3.229	1.036	2226.5	2.378	※
	高い	59	3.712	0.966	3551.5		
質 4	チームで協力する遊びを好む						
	運動能力が低い	48	2.729	1.047	1980.0	3.953	※※※
	高い	59	3.610	1.083	3798.0		
質 5	友達との意思の疎通が難しい						
	運動能力が低い	48	2.583	1.028	2999.5	2.676	※※
	高い	59	2.068	0.998	2778.5		
質 6	友達と遊ぶのが好き						
	運動能力が低い	48	4.438	0.823	2522.5	0.503	
	高い	59	4.542	0.652	3255.5		
質 7	内遊びが好き						
	運動能力が低い	48	3.417	1.028	2707.0	0.754	
	高い	59	3.288	0.911	3071.0		
質 8	他の子に付いて遊ぶことが多い						
	運動能力が低い	48	3.396	1.162	2900.0	1.986	※
	高い	59	2.915	1.222	2878.0		
質 9	自分の言い分を押し通す（折り合いを付けることができない）						
	運動能力が低い	48	2.604	1.125	2489.0	0.666	
	高い	59	2.780	1.233	3289.0		
質10	リーダー役になることが多い						
	運動能力が低い	48	2.167	1.173	1931.0	4.263	※※※
	高い	59	3.237	1.236	3847.0		
質11	一人で遊ぶのが好き						
	運動能力が低い	48	2.500	1.111	2979.0	2.547	※
	高い	59	2.000	0.928	2799.0		
質12	他の子に命令することが多い						
	運動能力が低い	48	2.333	1.136	2183.0	2.653	※※※
	高い	59	2.966	1.217	3595.0		
質13	先生にまとも付くことが多い						
	運動能力が低い	48	2.938	1.099	2574.0	0.117	
	高い	59	2.966	1.082	3204.0		
質14	マイルール（自分や特定のグループに都合の良い勝手なルール）を持ち出す						
	運動能力が低い	48	2.458	1.202	2422.0	1.103	
	高い	59	2.729	1.271	3356.0		
質15	ぼーっとしていることがある						
	運動能力が低い	48	2.958	0.967	3040.0	2.921	※※※
	高い	59	2.339	0.993	2738.0		
質16	ルールが単純な遊びを好む						
	運動能力が低い	48	3.104	0.951	2577.0	0.099	
	高い	59	3.136	0.918	3201.0		
質17	他の子に命令されることが多い						
	運動能力が低い	48	2.458	0.922	2644.0	0.348	
	高い	59	2.424	0.986	3134.0		
質18	遊びの中でトラブルをよく起こす						
	運動能力が低い	48	2.500	1.092	2454.5	0.889	
	高い	59	2.763	1.331	3323.5		
質19	いつもよく遊ぶ友達の数に平均して何人ですか？						
	運動能力が低い	48	2.896	1.134	2077.5	3.361	※※※
	高い	59	3.695	1.221	3700.5		

とが多い」(12)特徴を示し、また、「いつもよく遊ぶ友達の数の平均」(19)についても、運動能力が高いグループが低いグループに比較して高い数値を示している。一方で、運動能力が低いグループは高いグループと比較して、「友達との意思の疎通が難しい」(5)、「他の子に付いて遊ぶことが多い」(8)、「一人で遊ぶのが好き」(11)、「ぼーっとしていることがある」(15)の項目で高い数値を示した。

次に見方を変えて、友達の平均数の多少で比較を試みたものが表5である。「よく遊ぶ友達の数の平均」(19)の回答結果が3人以下のグループと4人以上のグループで比較をしたところ、月齢、走評価、跳評価、投評価、運動能力評価点、質問項目3、4、5、6、8、10、11、12、13、15において統計的に有意差が確認できた。すなわち、よく遊ぶ友達の数の平均が多い子は少ない子に比べて、月齢は高く、走、跳、投のいずれの運動能力項目においても優れており、総合的な運動能力は高い。また、「ルールが明確な遊びを好む」(3)、「チームで協力する遊びを好む」(4)、「友達と遊ぶのが好き」(6)、「リーダー役になることが多い」(10)、「他の子に命令することが多い」(12)特徴を示している。

一方で、よく遊ぶ友達の数の平均が少ない子は多い子に比較して、「友達との意思の疎通が難しい」(5)、「他の子に付いて遊ぶことが多い」(8)、「一人で遊ぶのが好き」(11)、「先生にまとり付くことが多い」(13)、「ぼーっとしていることがある」(15)の項目で高い数値を示した。

これらの結果は、運動能力の高低による比較とほぼ同様の傾向を示しており、運動能力が高い子(あるいは低い子)が示す特徴と、いつも遊ぶ友達の数が多い子(あるいは少ない子)の特徴がよく似ていることを示唆している。また、「友達と遊ぶのが好き」(6)、「先生にまとり付くことが多い」(13)の項目でそれぞれ有意差が確認できるのは、調査項目の趣旨から考えると首肯できる結果といえよう。

ここで、群れ遊びに関する調査項目(18項目)に関して、ワード法によるクラスター分析を行ってみた

ところ、図1のような結果が得られた。併合距離2を基準にしてクラスターを分類したところ、大きくわけて3つのクラスターが確認できた。

結合距離が近い順番に並べたものを表6にまとめた。なお、運動能力別、いつもよく遊ぶ友達の数の多少別の比較において、調査項目間で統計的に有意差が確認できたものにマークを付加している。

第1クラスターは遊びの中での自己主張やそれに伴うトラブルに関連する項目群、第2クラスターは遊びの中での主体性あるいは積極性に関連する項目群、第3クラスターは遊びの中での依存性あるいは消極性に関連する項目群であると考えられることができる。今回の結果から、運動能力の高低による比較、あるいは友達の数の多少による比較では、第2、第3クラスターに分類される質問項目において有意差が多く確認できた。運動能力が高い子、あるいはよく遊ぶ友達の平均数が多い子どもは、そうでない子どもに比べて、遊びの中での主体性や積極性が顕著に認められ、反対に運動能力が低い子どもは遊びの中で依存的あるいは消極的になっている傾向がこの結果から伺える。また、友達が少ない子どもは、自由遊びの間、先生にまとり付いて遊び時間を消化していることも指摘できよう。

今回の結果から総合的に考察すると、運動能力が高い子は園内での自由遊びにおいて遊び集団の中心となっている様子が伺える。群れ遊び活動と運動能力の間には関係があるといえる。ルールが明確である遊びが好きであることは、勝ち負けがはっきりする、自分勝手なマイルールを持ち込みにくい遊びを好むということである。彼らは、チームで協力するような遊びが好きであり、よく遊ぶ友達の数も多いが、遊びの中で他の子を支配的に動かす傾向も強いことが指摘できる。反対に、運動能力が低い子は他の子に支配的に動かされる傾向があり、友達の数も少なく、ともすれば一人で遊ぶことを選ぶことをこの結果は示唆している。加えて、友達との意思の疎通が難しい傾向があることから、積極的に群れ集団に関われない様子も伺える。

今回の結果から、保育者や教師は何に留意すればよ

表5 いつもよく遊ぶ友達の数の多少別による体格・運動能力・群れ遊び調査項目のU検定結果

	項目名	標本数	平均値	標準偏差	順位和	z 値	有意差
月齢							
	友達の数が少ない	91	75.253	3.638	5658.0	3.771	***
	多い	52	77.615	3.431	4638.0		
身長評価							
	友達の数が少ない	91	0.121	1.094	6636.0	0.365	
	多い	52	0.000	1.172	3660.0		
体型							
	友達の数が少ない	91	0.044	1.115	6574.5	0.100	
	多い	52	0.154	1.073	3721.5		
走評価							
	友達の数が少ない	91	-0.824	0.864	5998.0	2.500	*
	多い	52	-0.442	0.802	4298.0		
跳評価							
	友達の数が少ない	91	-0.956	0.953	6007.0	2.425	*
	多い	52	-0.519	0.852	4289.0		
投評価							
	友達の数が少ない	91	-0.626	0.985	5927.0	2.777	**
	多い	52	-0.173	0.901	4369.0		
運動能力評価点							
	友達の数が少ない	91	-2.407	2.049	5715.5	3.563	***
	多い	52	-1.135	1.804	4580.5		
質1	外遊びが好き						
	友達の数が少ない	91	4.000	1.033	6443.0	0.484	
	多い	52	4.096	0.975	3853.0		
質2	遊ぶ友達はいつも同じである						
	友達の数が少ない	91	4.088	1.092	6474.0	0.352	
	多い	52	4.231	0.877	3822.0		
質3	ルールが明確な遊びを好む						
	友達の数が少ない	91	3.396	1.053	6070.0	2.103	*
	多い	52	3.788	0.893	4226.0		
質4	チームで協力する遊びを好む						
	友達の数が少ない	91	2.890	1.048	5426.0	4.883	***
	多い	52	3.846	0.978	4870.0		
質5	友達との意思の疎通が難しい						
	友達の数が少ない	91	2.505	1.047	7203.5	2.853	**
	多い	52	1.981	0.918	3092.5		
質6	友達と遊ぶのが好き						
	友達の数が少ない	91	4.374	0.784	5929.0	3.037	**
	多い	52	4.750	0.480	4367.0		
質7	内遊びが好き						
	友達の数が少ない	91	3.473	1.026	6884.0	1.458	
	多い	52	3.231	0.807	3412.0		
質8	他の子に付いて遊ぶことが多い						
	友達の数が少ない	91	3.451	1.167	7248.0	3.012	**
	多い	52	2.808	1.189	3048.0		
質9	自分の言い分を押し通す（折り合いを付けることができない）						
	友達の数が少ない	91	2.604	1.228	6276.0	1.196	
	多い	52	2.808	1.067	4020.0		
質10	リーダー役になることが多い						
	友達の数が少ない	91	2.440	1.240	5699.5	3.673	***
	多い	52	3.269	1.239	4596.5		
質11	一人で遊ぶのが好き						
	友達の数が少ない	91	2.516	1.149	7226.0	2.954	**
	多い	52	1.942	0.895	3070.0		
質12	他の子に命令することが多い						
	友達の数が少ない	91	2.374	1.180	5762.5	3.422	***
	多い	52	3.077	1.118	4533.5		
質13	先生にまとり付くことが多い						
	友達の数が少ない	91	3.154	1.074	7210.0	2.862	**
	多い	52	2.615	1.013	3086.0		
質14	マイルール（自分や特定のグループに都合が良い勝手なルール）を持ち出す						
	友達の数が少ない	91	2.549	1.223	6386.0	0.723	
	多い	52	2.654	1.136	3910.0		
質15	ぼーっとしていることがある						
	友達の数が少ない	91	2.901	1.044	7370.5	3.565	***
	多い	52	2.250	0.988	2925.5		
質16	ルールが単純な遊びを好む						
	友達の数が少ない	91	3.242	0.958	6680.0	0.566	
	多い	52	3.135	0.886	3616.0		
質17	他の子に命令されることが多い						
	友達の数が少ない	91	2.560	0.991	6791.5	1.065	
	多い	52	2.385	0.932	3504.5		
質18	遊びの中でトラブルをよく起こす						
	友達の数が少ない	91	2.484	1.259	6381.0	0.740	
	多い	52	2.635	1.268	3915.0		

いと考えることができるだろうか。1つ目は、子どもたちの活動をしっかりと観察し、群れ集団に加われない子どもたちをサポートすることである。群れ集団の中に入ってしまうと、群れ遊びの中で子どもたちは様々な体験をし、積極的に体を動かすことで体力の増進を期待することもできるが、そのきっかけが大

切なのである。2つ目は、自由遊びの中でも支配的（あるいは被支配的）な言動がないかどうかチェックし、問題があれば子どもたち同士で是正できるような働きかけを行う必要があることである。幼稚園教育要領においては、教師がトラブルを解決してしまうのではなく、子どもたちが当事者として解決できるように

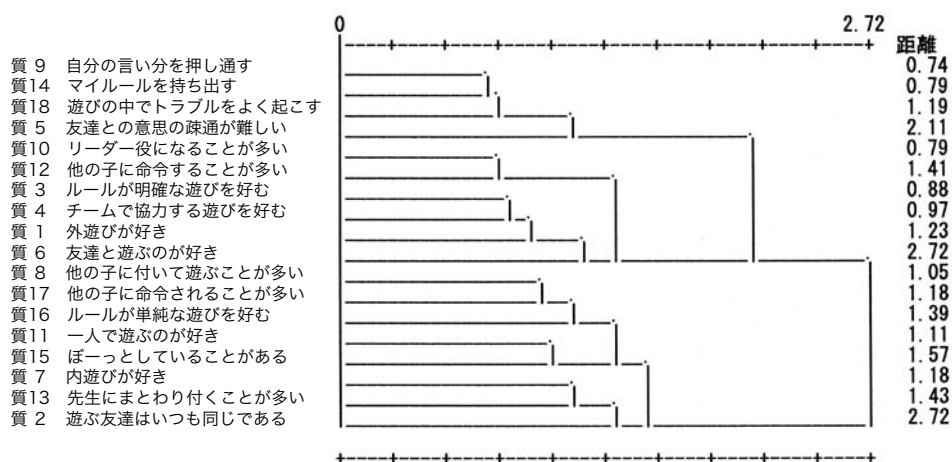


図1 クラスター分析 基準：ワード法

表6 クラスター分析の結果と運動能力別・友達の多少別比較の関係

クラスター	調査項目	運動能力	友達の数
第1クラスター	質9 自分の言い分を押し通す（折り合いを付けることができない）		
	質14 マイルール（自分や特定のグループに都合が良い勝手なルール）を持ち出す		
	質18 遊びの中でトラブルをよく起こす		
	質5 友達との意思の疎通が難しい	○	○
第2クラスター	質10 リーダー役になることが多い	○	○
	質12 他の子に命令することが多い	○	○
	質3 ルールが明確な遊びを好む	○	○
	質4 チームで協力する遊びを好む	○	○
	質1 外遊びが好き		
	質6 友達と遊ぶのが好き		○
第3クラスター	質8 他の子に付いて遊ぶことが多い	○	○
	質17 他の子に命令されることが多い		
	質16 ルールが単純な遊びを好む		
	質11 一人で遊ぶのが好き	○	○
	質15 ぼーっとしていることがある	○	○
	質7 内遊びが好き		
	質13 先生にまとも付き合うことが多い		○
	質2 遊ぶ友達はいつも同じである		

配慮することが求められていると考えるが、そうした経験が弱者にも配慮ができるリーダーの育成につながり、園内での群れ遊びの発展につながると考えることができよう。運動能力が高い子は遊びに対して中心的かつ積極的であり、リーダー的な存在であるが、本当の意味でのリーダーは、運動能力が低く、友達が少なく、他の子と円滑にコミュニケーションができない子どもにも配慮ができる存在であって欲しい。

また、今回、第1クラスターに属する項目群に関しては、あまり大きな差異が見られなかった。第1クラスターに属する項目は、群れ遊びが円滑に行われるにあたってはいずれも障害になりやすい事項であるといえるが、こうした要因は単純に運動能力の高低だけで比較しても関係性がみえてこないという証左であろう。このあたりの関係についてはまた別の視点からの検討が必要であると考えられる。

結 論

本研究では幼児期の群れ遊びと運動能力の関係について調べることを目的として、体格・運動能力の測定と、園内での自由遊びにおける子どもの様子を質問紙形式で調査した。その結果、以下のことが確認できた。

- 1) 運動能力が高い子は低い子に比較して、ルールが明確でチームで協力するような遊びを好み、リーダー役になることが多く、よく遊ぶ友達の数の平均も多いが、他の子に命令することも教師からみて顕著にある。反対に、運動能力が低い子は高い子に比べて、友達との意思の疎通が難しく、他の子に付いて遊ぶことが多く、一人で遊ぶことが好きであり、自由遊びの時間帯には一としてしている様子も伺える。
- 2) よく遊ぶ友達の数について質問したところ、平均人数が多い（あるいは低い）子は運動能力が高い（あるいは低い）子の特徴とよく似た結果を示した。友達の数が多い子は運動能力が高く、友達と遊ぶのが好きである。反対に、友達の数が少ない

子は運動能力が低く、自由遊びの時間帯には先生にまわり付くことが多い。

- 3) クラスター分析を用いて質問項目を層別化したところ、3つのクラスターが確認できた。第1クラスターは遊びの中での自己主張やトラブルに関連する項目群、第2クラスターは遊びの中での主体性や積極性に関連する項目群、第3クラスターは遊びの中での依存性や消極性に関連する項目群であると判断した。運動能力の高低、友達の数の多少による比較では第2、第3クラスターの質問項目群において有意な結果が多く得られた。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査項目の検討ならびに調査結果の集計に関して助言と助力をいただきました木村由美氏、竹田理香氏にお礼を申し上げます。

註

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領』, 2008。
- 2) 朝日新聞「子の運動能力、向上の兆し」, 2010年10月17日。
- 3) 原田碩三『「群れ遊び」のすすめ』黎明書房, 1990。
- 4) 原田碩三『押しくらまんじゅう花いちもんめ』農文協, 1991。
- 5) 原田碩三・徳田泰伸編『保育の実践』北大路書房, 1992。
- 6) 原田碩三『新版幼児健康学』黎明書房, 1997。
- 7) 明星幼稚園・しらゆり幼稚園・美作大学附属幼稚園「調和のとれた心と体の発達を目指して～群れ遊びを通じた取り組み～」平成21年度全日本私立幼稚園連合会中国地区私立幼稚園教育研修会岡山大会, 2009。
- 8) 原田碩三『新版幼児健康学』黎明書房, 1997, 201～203頁。
- 9) 前掲書, 192～199頁。
- 10) 原田昭子他「幼児の体格・運動能力の評価改訂について」『教育医学』第44巻4号, 629～643頁, 1999。
- 11) 原田昭子他「WEB上での幼児の体格・運動能力評価・判定」『教育医学』第50巻1号, 72～73頁, 2004。

